

【研究報告】

臨床看護師のサポートを受けた基礎看護技術演習での 学生の学びと継続に向けた課題

山 本 加奈子*, 吉 田 和 美*

【要 旨】

臨床看護師の演習サポートを受けた基礎看護技術演習における学生の学びと継続への課題を明らかにすることを目的に、23年度より3年間自作の質問紙調査を実施した。初回調査で指導方法の統一が課題となり演習方法の工夫を試みてきた。25年度には「技術習得に役立った」($p=.047$)「臨床の様子が聞けた」($p=.015$)「技術の活用」($p=.013$)「指導方法の違い」($p=.000$)の改善に有意差を認めた。自由記載では、演習の効果として、【臨床現場のイメージ化】【臨床での技術の応用を知る機会】【習練への意識の高まり】【ロールモデルの発見】【ケア場面の具体化】【基礎を身に付ける大切さの実感】【看護師としての心構えを学ぶ】であった。課題として【指導方法の違いによる戸惑い】であった。臨床看護師による演習サポートは、技術の習得のみならず、よりリアリティーをもった演習の実現に役立っていたが、指導方法統一は引き続き課題である。

【キーワード】 基礎看護技術, 看護技術演習, 臨床看護師演習サポート

I. はじめに

看護師はより高い実践能力が求められる中、看護基礎教育で習得した知識や技術と、卒後臨床で求められることのギャップから、新人看護師の早期離職が問題視されている。平成24年度からの新カリキュラムでは、看護技術を臨地で活用可能なレベルとするために、演習の強化が示された。従来の看護基礎教育機関での演習は、学生と教員の2者で行われていたが、教育機関と臨床現場との連携により、学生-教員-臨床看護師の3者で看護基礎教育を行う循環型教育への取り組みが、近年新しく始まっている(真鍋, 光木, 岡山, 2011a; 倉ヶ市, 橋元, 2011)。A大学では平成22年度より、この循環型教育への取り組みとして、大学の授業に臨床看護師の参加をすすめる制度を導入した。研究者らはこの制度を活用し、主に基礎看護技術の演習科目において、臨床看護師のサポートを得た演習を行っている。演習に臨床看護師が関わることで、学生は、より臨場感をもって演習に望み、臨床看護師による臨床での技術活用の実際やデモンストレーションなどのミニレクチャーを通し、臨床現場の実践を学生に伝える機会となり、学生の実践能力の向上を期待している。

研究者らは、平成23年度に、臨床看護師の演習サポートを受けて行った1年生の基礎看護技術(日常生活援助技術・診療の補助技術)の演習終了後に、

学生の学びの実態と課題を調査した。その結果、学生は、臨床看護師が演習サポーターとして関わることにより、臨床現場のイメージ化や、学習へのモチベーションにつながるという効果が明らかとなった。課題としては、学生は演習サポーターとの交流を希望する声がきかれるなど、臨床看護師を演習サポーターとして活用している教員側の意図が学生に十分伝わっていないこと、教員と臨床看護師の指導内容に違いがあること、配置に偏りがあることが把握された(山本, 川西, 吉田, 三味, 迫田, 2012)。これらの改善を試みながら、平成24年度、平成25年度も引き続き、臨床看護師の演習サポートを活用した演習を行った。本研究では、臨床看護師のサポートを受けておこなった基礎看護技術演習による学生の学習効果と課題を明らかにし、より効果的な授業方法を検討することを目的とした。

II. 臨床看護師による演習サポートの概要

演習サポートは、平成24年、平成25年とも以下の流れで行なった。

- ① **協力者の募集**：前期・後期の授業開始1ヶ月前を目安に、各回の演習内容と日時を明記した演習サポートの協力依頼のチラシを、実習関連施設および大学の設置主体に関連する施設の看護部に配布し、演習協力者を募った。

* 日本赤十字広島看護大学

- ② **申し込み受付**：受付専用のメールアドレスを設けて、臨床看護師の演習協力の申し込みを受け付けた。
- ③ **事前準備**

教員：協力者には、演習の10日前を目安に資料（授業資料、演習評価表、学生のレディネス、ミニレクチャーの依頼、演習の流れおよび指導のポイントなどの指導要領）を送付した。事前に、資料に目を通し、演習の実施方法や留意点に関する動画教材（インターネットを利用し大学ホームページより閲覧可能）を視聴して頂けるよう依頼した。また、ミニレクチャーとして、臨床での技術活用の実際や応用、技術に関連する体験談など、演習項目に応じて学ばせたいねらいを明らかにした上で、臨床でのケアの実際の紹介や技術のデモンストレーション、もしくはロールプレイの依頼をした。

臨床看護師：送付した資料と演習技術に関する動画教材を閲覧し、指導要領と併せ、演習での教授内容を確認の上、各自で準備。
- ④ **当日打ち合わせ**：教員と同等の演習指導が行えるよう、演習開始前に約30分間打ち合わせを行った。打ち合わせでは、学生のレディネスおよび到達目標を確認した上で、演習の流れを説明し、基礎でおさえるべき原則に沿った指導のポイントを明確にし、指導内容の統一化を図った。また、ミニレクチャーの内容・学生に伝えたいねらいやポイントの確認を行った。
- ⑤ **技術指導**：1回の演習では、約75名の学生を教員6名と、臨床看護師3名（平均）で担当。1人当たり約10名の学生の演習項目に沿った個別の技術指導を行った。
- ⑥ **ミニレクチャー**：演習終了後、約5～10分間のミニレクチャーを実施してもらった。ミニレクチャーでは、それぞれの演習項目に応じ、患者の反応を含めたケア実践の効果、援助を行う上で大事にされていることなどについての臨床体験談や、臨床の場面を再現した技術のロールプレイや、デモンストレーションを、小グループもしくは、クラス単位で、学生全員に対して実施してもらった。
- ⑦ **振り返り**：演習の振り返りとして、学生の演習状況・到達度を確認した。技術に関連した新人教育の実際と課題、技術指導について、情報交換を行った。

Ⅲ. 平成24年度と平成25年度の改善点

平成24年度には、前年度の課題であった、臨床看護師を演習サポーターとして活用している教員側の意図が学生に十分伝わっていないこと、教員と臨床看護師の指導内容に違いがあること、配置に偏りがあることの3点に対し改善を行った。

指導方法の統一に関しては、演習では基礎教育としておさえるべき原則を明確化し、原則を踏まえた基本手技の習得に重点を置き、臨床での技術の応用は、ミニレクチャーの時間に伝えとし、基礎と応用を伝える場面を区別することを打ち合わせで確認した。配置に関しては、臨床看護師による個別指導は、全員最低2回以上受けられるようグループ配置を調整した。さらに、毎回の演習にミニレクチャーの時間を設けることで、個別の技術指導に臨床看護師が担当しなかったグループにも、臨床の視点からの学びを共有できるよう小グループまたは全体で臨床看護師に関われるよう工夫した。また、臨床看護師の演習サポーターを受ける教育側のねらいを意図的に教材化できるよう、ミニレクチャーの内容を工夫した。

平成25年度には、平成24年度の改善点に加え、臨床看護師と教員をペアで配置し、臨床看護師の配置の偏りをなくすことと、指導の統一化を図った。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究対象者

基礎看護技術演習において、臨床看護師に演習サポートを受けた看護大学の平成24年度1年生149名、平成25年度1年生152名。

2. 研究期間

平成24年4月～平成26年3月

3. データの収集方法

平成24年度と平成25年度に臨床看護師の協力を得て行った1年生の基礎看護技術の授業がすべて終了した後、自作の質問紙を配布し、研究協力を依頼した。質問内容は、全演習の中で臨床看護師に直接指導を受けた回数を問い、臨床看護師参加による演習の満足度1項目、看護技術力・看護判断力・指導方法・臨床への活用・演習方法に関することなど24項目について、5段階リッカートスケール（そうである、まあまあそうある、どちらともいえない、あまりそうではない、そうではない）で回答を求めた。さらに、臨床看護師の参加で特に印象に残っていること、臨床看護師が技術演習に関わることで特に学びになったこと、改善点・要望について自由記載を求めた。A大学事務局前に設置した回収箱への自

由投函により、質問紙を回収した。

4. データの分析

選択式回答は1～5点で点数化し、Shapiro-Wilkの検定で正規性がない項目があったため、平成24年度と平成25年度の調査結果の比較としてMann-WhitneyのU検定により解析した。解析にはSPSSver16.0 for Windowsを使用し有意水準は0.05とした。

自由記載の内容は、内容の類似性に基づきコード化、さらに抽象度をあげカテゴリー化した。分析は、質的研究の経験者複数名で行い、内容の妥当性・信憑性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

すべての演習が終了した後、書面を用いて、研究の目的・方法、利益・不利益とその対応、結果の公表について説明した。また、自由意志による研究協力を求め、成績には影響ないこと、無記名による回収箱への投函により匿名性を保持することを保障し、質問紙の投函をもち同意とすることを説明し、回収は研究者不在下の投函により強制力が働かないよう配慮した。日本赤十字広島看護大学の研究倫理審査の承認（No1226）を得た上で行った。

V. 結 果

1. 演習項目と臨床看護師の演習サポート人数

各年度全13回の演習に、平成24年度は29名、平成25年度は42名の臨床看護師が演習サポートにあたった（表1）。

2. 質問紙回収率と臨床看護師に指導を受けた回数および満足度

平成24年度の回収は、54部（回収率36.2%）、有効回答54部であった。学生が個別に技術指導を受けた回数は2～5回、平均2.5回であった。満足度は平均4.5であった。

平成25年度の回収は、109部（回収率71.7%）、有効回答109部であった。学生が個別に技術指導を受けた回数は2～6回、平均3.3回であった。満足度は平均4.73であった。

3. 学生の学びに関する平成24年度と平成25年度比較

平成24年度の結果は、平均が4.0を下回った項目は、4項目「指導方法の違い（2.5）」「毎回臨床看護師のメンバーが変わるため緊張した（3.3）」「関わり時間の不足（3.2）」「配置の偏り（3.3）」であった。

平成25年度の結果は、平均が4.0を下回った項目は、5項目「指導方法の違い（3.8）」「毎回臨床看護師のメンバーが変わるため緊張した（3.0）」「関わり時間の不足（3.4）」「配置の偏り（3.6）」「質問しにくい（3.7）」であった。

平成24年度と平成25年度の比較により、「技術習得に役立った」（ $p=.047$ ）「臨床の様子が聞けた」（ $p=.015$ ）「技術の活用がわかった」（ $p=.013$ ）「指導方法の違い」（ $p=.000$ ）の点数が有意に上昇した（表2）。

表1 演習項目と臨床看護師の演習サポート人数

	演習項目	H24	H25
1	ベッドメイキング	1	0
2	バイタルサインの測定①	1	4
	バイタルサインの測定②	1	
3	体位変換	3	1
4	車椅子・ストレッチャーへの移乗・移送	2	0
5	寝衣交換	2	5
6	清拭／洗髪① ^{注1}	2	6
7	清拭／洗髪② ^{注1}	3	5
8	感染予防	0	1
9	食事・口腔ケア	2	3
10	排泄（浣腸・導尿）	2	2
11	吸引	1	6
12	注射（筋肉内・皮下注射）	6	4
13	採血	3	5
合 計		29	42

注1）清拭／洗髪は物品の都合上2週にわけ半数ずつ演習を行っている

表2 学生の学びに関する平成24年度と平成25年度比較

質問内容	平均点		p
	H24	H25	
	n = 54	n = 109	
1 より実践に近い技術が学べたと思う	4.7	4.82	0.047
2 臨床看護師の指導が自分の技術習得に役に立った	4.7	4.85	
3 ケアについての判断力を高める助けになったと思う	4.78	4.77	
4 対象者の状態に合わせたケアの重要性の認識が強まった	4.76	4.78	
5 臨床看護師を身近に感じることができた	4.76	4.81	
6 臨床の看護師の仕事・役割を理解するのに役立った	4.83	4.65	0.015
7 臨床看護師と接する機会になり実習前に自信をつけることができた	4	4.1	
8 演習の中で病院での患者の様子が聞けた	4.46	4.66	
9 演習の中で、病院の様子やアドバイスを聞けた	4.52	4.71	
10 演習が、病院でどのように活用されるかがわかった	4.15	4.47	
11 コミュニケーションの取り方が参考になった	4.39	4.51	0.013
12 対象者の思いや配慮について、学ぶのに役立った	4.48	4.63	
13 医療チームの一員であることの意識が高まった	4.04	4.11	
14 演習の際の個別の臨床看護師の指導・助言が役に立った	4.57	4.76	
15 演習後の全体での臨床看護師からのコメント・体験談が役に立った	4.8	4.79	
16 演習後の小グループでの臨床看護師からのコメント・体験談が役に立った	4.74	4.81	0.000
17 看護の素晴らしさをさらに強めるものになった	4.46	4.41	
18* 講義内容や手順と、臨床看護師の指導方法に違いがあった	2.5	3.8	
19* 毎回臨床看護師のメンバーが変わるため緊張した	3.31	3.02	
20* 教員に比べて、聞きたいことがきけなかった	4.17	3.71	
21* 教員に比べて、指導が理解しにくかった	4.19	4	
22* 教員に比べ、質問に答えてもらえなかった	4.39	4.13	
23* 臨床看護師への質問や関わりの時間が十分でなかった	3.17	3.4	
24* 臨床看護師の配置にかたよりがあった	3.26	3.62	

*逆転項目：調整済み（点数が高いほうが「よい」回答）
色塗り箇所は、昨年度より改善

Mann-Whitney の U 検定

4. 自由記載からみる臨床看護師による演習サポートの効果と課題

自由記載の内容から、臨床看護師による演習サポートの効果と課題に関するサブカテゴリー、カテゴリーを見出した。なお、本文中では、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》，コードを [] で示す。

平成24年度の結果より、演習サポートの効果として、25サブカテゴリーから、【臨床現場のイメージ化】【臨床での技術の応用を知る機会】【習練への意識の高まり】【ロールモデルの発見】【ケア場面の具体化】【基礎を身に付けることの大切さの実感】【看護師としての心構えを学ぶ】の7カテゴリーが見出された。また、課題として、7サブカテゴリーから【指導方法の違いによる戸惑い】【臨床看護師との関わりの不足】の2カテゴリーが見出された。

平成25年度の結果においても、平成24年度と同様のカテゴリーに分類されたが、【臨床現場のイメージ化】のサブカテゴリーに《患者の視点からのアドバイスが聞けた》と臨床看護師ならではの効果が新たに抽出された（表3）。

ここでは、平成25年度に抽出された結果をまとめて述べる。

1) 【臨床現場のイメージ化】

臨床看護師の参加協力を得て行った演習では、[技術がどのような場面で活用されているのかわかった] [今習っている技術がどのように臨床で使われるかわかった] など《技術活用が場面がわかった》という効果が把握された。また、技術の活用場面を通し、《実際の看護の様子がわかった》《患者の様子がわかった》という、より具体的な臨床場面のイメージと、《患者の視点からのアドバイスが聞けた》

表3 自由記載からみる臨床看護師による演習サポートの効果と課題

カテゴリー	サブカテゴリー
臨床現場のイメージ化	技術活用場面がわかった
	実際の看護の様子がわかった
	患者の様子がわかった
	患者の視点からのアドバイスが聞けた ^{※1}
	臨床をリアルに意識できる機会になった
	実習の不安が軽減した
臨床での技術の応用を知る機会	臨床での応用を学んだ
	実践的な指導・助言を得た
	実施方法の選択ができた
	個別性（に応じた方法）を学べた
	教科書にはない技・工夫を教えてもらった
	時間短縮の大切さを学んだ
	病院でのスピードがわかった
	効率的な方法を教えてもらった
習練への意識の高まり	モチベーションがあがった
	積極的に質問できた
ロールモデルの発見	目標や理想が具体的になった
	自分の看護の参考になった
	お手本が参考になった
ケアの場面の具体化	ケアの際のコミュニケーションの方法が学べた
	不安を与えない具体的なケア方法が学べた
	患者と関わる際の注意点が学べた
基礎を身に付けることの大切さの実感	基礎を身に付ける大切さを学べた
	演習が臨床で活かされることを実感した
看護師としての心構えを学ぶ	臨床での心構えを学んだ
	緊張感を意識できた
指導方法の違いによる戸惑い	教員の指導の方が細かい
	厳しく指導してほしい
	教員と指導方法が違い戸惑った
臨床看護師との関わり不足	配置に偏りがあった
	人数が少ない
	関わり時間が不足

※1 平成25年度新たに抽出されたサブカテゴリー

と臨床看護師の指導ならではの効果が把握された。さらに、実習未経験の学生であったが、よりリアリティーのある演習により《臨床をよりリアルに意識できる機会になった》《実習の不安が軽減した》という効果が把握された。直接臨床看護師に技術指導を受けることのほか、各単元で、それぞれの技術項目に応じたミニレクチャーの時間を設けたことにより、学内演習だけでは意識できない患者の状態や看護の実際など【臨床現場のイメージ化】につながっていた。

2) 【臨床での技術の応用を知る機会】

学内演習では、基礎看護技術を習得する時間とし

ており、技術の基本的な手順に沿って原理・原則をおさえながら指導することを、教員・臨床指導者とも共通認識し指導している。臨床看護師による技術指導やミニレクチャーを通し、学生たちは《臨床での応用を学んだ》《実践的な指導・助言を得た》《実施方法の選択ができた》《個別性に応じた方法を学べた》《教科書にはない技・工夫を教えてもらった》というように、看護技術の基礎を学ぶ中で、より実践的な指導を受け、【臨床での技術の応用を知る機会】になっていた。また、ミニレクチャーの中での実演を通し、自分たちの実施のスピードの違いから、《時間短縮の大切さを学んだ》《病院でのスピードが

わかった》《効率的な方法を教えてもらった》など、臨床のスピード感や、効率性の大切さを学ぶ機会になっていた。

3) 【習練への意識の高まり】

臨床看護師によるミニレクチャーの中で、実演を見たり、技術の活用や患者の反応を聞いたりすることにより、[意欲が増し充実した演習を行うことができた] [(実際の場面を実感し) 学習に意欲的に取り組もうという気持ちになれた] [より臨床に近い話が聞けモチベーションアップにつながる] [もっと練習しようと思った] [もっと上手になりたい] など、技術練習に対し《モチベーションがあがった》という効果が把握された。さらに、よりリアリティーのある体験談などを聞いたことを機に、臨床看護師に[こういう患者の場合はどうするのか] [このような場合どうするのか] など、技術を身に付け、臨床で活用することに主眼を置き、色々な場면을想定し《積極的に質問できた》という姿勢が伺え、【習練への意識の高まり】の機会となっていた。

4) 【ロールモデルの発見】

臨床看護師による技術指導や、実演や体験談に触れることにより[自分もあのようなナースになりたい] [目標や理想などいろいろと湧いてくる] など、《目標や理想が具体的になった》という効果が把握された。また、[どのようなところに目が向いているのかわかり、自分の看護の参考になった] など、《自分の看護の参考になった》、[お手本を見せて頂いたのが、感動し、印象に残っている] など、《お手本が参考になった》というように、自分もこのような看護がしたい、こんな看護師になりたい、という【ロールモデルの発見】につながっていた。

5) 【ケア場面の具体化】

臨床看護師によるケア場면을再現してもらう実演(デモンストレーション)により、[患者さんとのやり取りの仕方が勉強になる] [臨床での患者とのコミュニケーションの方法がきけた] [援助を行いながらコミュニケーションをとる方法] [患者さんとのやりとりを詳しく聞ける] など、《ケアの際のコミュニケーションの方法が学べた》という効果が把握された。また、[患者の緊張をほぐしながら行う方法が学べた] [患者に不安を与えない技術的な面での指導] など、患者の視点からのより具体的な場面でのアドバイスを受けることにより、《不安を与えない具体的なケア方法が学べた》という効果につながった。さらに、[実際に患者さんに関わる時に注意していること] を直に聞いたことから、《患者と関わる際の注意点が学べた》という効果につな

がった。技術演習では、学生同士で看護師役患者役を行うため、臨場感には限界がある。そのため、学生同士では学びにくいコミュニケーションの取り方や、患者の不安に配慮したケア方法、患者と関わる際の注意点など、臨床指導者の体験をもとに学ぶことができ、学内での技術演習における【ケアの場面の具体化】につながっていた。

6) 【基礎を身に付けることの大切さの実感】

臨床看護師の臨床での経験談を聞くことにより、[臨床では応用が必要になる] など、応用の大切さを意識するが故、[基礎があるから応用ができる] [基礎を身に付けることが大切] など、《基礎を身に付ける大切さを学べた》という効果につながっていた。また、[演習でできないことは臨床でもできない] [今やっている演習が臨床の場でいかされることを実感] など、《演習が臨床で活かされることを実感した》ことから、基礎を身に付けた上での応用があることを学び、【基礎を身に付けることの大切さの実感】となっていた。

7) 【看護師としての心構えを学ぶ】

臨床での様子が聞け[心構えとして参考になった]、話の状況に現実味があり[「看護師としてのいのちを預かっている」という責任の大きさと、心構えを学んだ]、[臨床に行った際のアドバイスをもらえた] など、《臨床での心構えを学んだ》という効果が把握された。また、技術次第で命を左右することもあることを聞き、[緊張感を持ってやらないといけない] など、《緊張感を意識できた》という効果が把握された。臨床看護師との関わりは、臨床現場をより具体的に意識する機会となり【看護師としての心構えを学ぶ】という態度形成にもなっていた。

8) 【指導方法の違いによる戸惑い】

[教員の方が細かいとこを教えてくれる] [もっとつつこんで欲しい] など、《教員の指導の方が細かい》ところまで確認されるということから、臨床看護師による指導は、[やさしすぎる] [もっと厳しく指導してほしい] など、より《厳しく指導してほしい》という希望が聞かれた。また、[教員と手順が違って、混乱した]、教員と臨床看護師では、[指導方法が違う] ことから《教員と指導方法が違い戸惑った》という意見が聞かれた。

9) 【臨床看護師との関わりの不足】

演習時の教員と臨床看護師の配置について、[均等に配置してほしい] [全員にあたるようにしてほしい] など、《配置に偏りがあった》という意見が聞かれた。全員が平等に一律にかかわるには限界がある中、多くの学生が臨床看護師との関わりを希望

するため、[人数を増やしてほしい][臨床看護師が来る演習を増やしてほしい][男性の参加を希望]など、《人数が少ない》という意見が聞かれた。また、[もっと関わりたい][もう少し話を聞きたい][話をする時間が欲しい]など、《関わり時間が不足》しているという意見が聞かれ、学生の視点からは、【臨床看護師との関わりの不足】という課題が見いだされた。

VI. 考 察

1. 臨床看護師による演習サポートによる学生の学び

臨床看護師による演習サポートを受けた演習の満足度は、調査の時期が演習直後でなかったため、平成24年度の回収率が低かったのではないかと考えられるが、2年間とも平均4.5%以上であり、学生の総合的な満足度は高いと評価できる。具体的には、「技術習得に役立った」「技術の活用がわかった」「看護師の役割の理解に役立った」「ミニレクチャーが役立った」といった項目の点数が高く、特に「技術習得に役立った」「技術の活用がわかった」は平成25年度には有意な改善傾向を認めた項目である。自由記載の内容からも、【臨床現場のイメージ化】や【臨床での技術応用の機会を知る】ことにつながっていたことが把握できる。技術指導だけでなく、技術の臨床での活用方法を学ばせることを意図として組み入れたミニレクチャーにより臨地実習未経験であっても、臨床現場をより具体的にイメージ・実感できたことから、看護師の役割を理解しつつ、技術の活用の実際の場面まで学ぶことができたと考えられる。梅田ら（2010）や、江尻ら（2011）は、成人看護学演習における授業補助者として臨床看護師の導入は、少人数制の技術教育を行うことができるという環境を整えることで、学生はよい授業であると考え、授業補助者の導入は不可欠であると述べている。つまり、指導方法の統一ができれば、教員不足の解消の意味で、教員以外の授業補助者の必要性が述べられている。A大学の臨床看護師演習サポートの目的は、より実践的な学びを学生に与える効果を期待して導入をはじめた。臨床看護師による演習サポートは、授業補助者としてのマンパワーではなく、導入のねらい通り、学生には、より実践的な技術の習得を助ける効果が期待できるといえる。

また、看護の初学者が学内において臨床看護師の実践を目の当たりにすることは、【ロールモデルの発見】や、技術の【習練への意識の高まり】など学習のモチベーションを上げることが期待できる。一

方で、【臨床での技術の応用を知る機会】は、《時間短縮の大切さを学んだ》《効率的な方法を教えてもらった》など、学生は、「応用＝効率的」と捉え、基礎を身につける以前に、応用にばかり目がいつてしまうことが危惧された。基礎教育として学ばせたい内容と、それらの臨床での応用を明確に区別するために、教員と臨床看護師の事前の打ち合わせにおいて指導の統一化を図った。具体的には、基本的な手順の確認を行うとともに、個別の技術演習では、基礎看護技術演習でおさえるべき基礎的な原理・原則のみを指導し、臨床での応用となる技術の活用や、臨床での経験や方法を伝えるのはミニレクチャーの時間内のみとすることとした。このことにより、基礎教育としておさえるべき到達度が学生にも明確に伝わり、「基礎があるから応用ができる」「基礎を身に付けることが大切」など、基礎と応用を区別した上で、【基礎を身に付ける大切さの実感】という結果が得られたのではないかと考える。

平成25年度には、平成24年度と比較し、「技術習得に役立った」($p=.047$)「臨床の様子が聞けた」($p=.015$)「技術の活用がわかった」($p=.013$)「指導方法の違い」($p=.000$)の点数に有意な改善を認めた。また、「関わり時間の不足」「配置の偏り」は、有意差はないまでも、いずれも改善した。臨床看護師のサポート制度導入当初からの課題であった「指導方法の違い」が改善されたのは、大きな成果であるが、自由記載では、【指導方法の違いによる戸惑い】も依然把握された。津田ら（2006）は、複数の教員による看護技術指導において、教員間における指導が統一されていないこと、及びそのことから精神的に混乱や不安があると報告している。一方、梅田ら（2010）は、複数の教員と臨床看護師を取り入れた演習においても、学生の混乱は生じず、小グループ制での演習が実現することから、演習の質を保障する上でも有効であったと報告している。複数の教員と臨床看護師が指導にあたることは、各人の指導に対する経験値や、大事にしたいポイント、すなわち看護観の違いから、全く同一の指導ができるとは限らない。そのため、“この順番でないといけない”という手順を教える教育ではなく、どのような状態の患者にも共通しておさえるべき技術の中に含まれる安全・安楽の原則を教えていく教育方法が必要であると考える。

【ケア場面の具体化】については、《ケアの際のコミュニケーションの方法が学べた》《不安を与えない具体的なケア方法が学べた》《患者と関わる際の注意点が学べた》など、実際に技術を患者に提供す

の際のヒューマン・ケアリングな関わりについて学んでいる。また、【看護師としての心構えを学ぶ】も、よりリアルに臨床場面がイメージできたことの効果であるといえる。これらは、学生同士の学内演習ではイメージしにくい部分であり、模擬患者の活用などが効果的であると考えるが、臨床看護師のミニレクチャーなどの関わりからも学べることを期待できる。有意な改善を認めた「技術の活用がわかった」($p = .0471$)、【臨床での技術の応用を知る機会】とともに、臨床看護師の演習サポートは、ヒューマン・ケアリングな関わりを学ぶ機会であり、学内での技術演習を実際の臨床場面において活用できるものとして位置づける機会になっていると考えられる。

2. 臨床看護師による演習サポートの課題

「指導方法の違い」「関わり時間の不足」「配置の偏り」については、調査開始当初より低い結果であり、課題となっていた。「指導方法の違い」は、平成23年度から平成24年には、改善が見られなかったが、平成25年度の結果には、有意差を認め、改善されたことが把握された。臨床看護師は、学生から「臨床ではどうですか？」などの質問を受けることから、「臨床ではこのようにやっている」という応用を演習の中で伝える傾向があったため、平成24年度には、臨床看護師との演習前の打ち合わせの中で、手順を確認した上で、技術演習でおさえておくべき原理・原則のポイントを明確化した。臨床での技術の実際や応用は、演習終了後のミニレクチャーにて伝えるよう統一化を図った。また、平成25年度には、教員と臨床看護師をペアで配置し、教員・臨床看護師双方が、常に学生の状況と指導方法を確認しながら演習することに変更した。このことにより、指導方法の違いが、改善され、より統一性のある技術演習が実現されたといえる。また、学生の「指導方法が違う」という意見は、本調査方法ではその詳細までは不明ではあるが、臨床看護師にも「教員のように厳しく指導をして欲しい」、「根拠を質問してほしい」といった意見があるように、技術の手順ではなく、関わり方の違いが、学生には「指導方法の違い」として捉えられている可能性が考えられる。事前の打ち合わせにおいては、技術習得の中での、根拠の確認ポイントについても統一しておく必要があるといえる。

「配置の偏り」については、調査開始より課題として把握されたため、グループ編成、教員配置をする際に、なるべく偏りがないように配慮した。しかし、平成24年度にも改善されず、平成25年度には、教員とペアで配置するという方法を取り、さらなる

改善に努めた。「関わり時間の不足」とともに、平成25年度にはいずれも点数の改善はみられたが、他の項目に比べ、依然低い結果であり引き続き課題である。

3. 今後の看護基礎教育における臨床看護師の活用への示唆

従来の学内演習においては、技術の習得中心であるが、技術を活用するという点においては、臨床看護師の果たす役割が大きいと考えられる。臨床看護師が演習サポートに参加することは、梅田ら(2010)や江尻ら(2011)は少人数制の演習を実現する意味で、有益であると報告している。しかし、限りある教育人員の中で、学内演習をいかに効率よく行い、学生の学びを保障していくかが大切であるといえる。臨床看護師の演習への導入は、あくまでも教育と臨床の乖離を埋めるための人事交流(眞鍋ら, 2011b)や、ユニフィケーション(佐藤, 當房, 高橋, 二見, 綿貫, 2005)を目的にするものであり、教員の人員不足の補填であってはならないと考える。A大学においても、臨床看護師を活用する意味、教員と臨床看護師の役割の違いを明確化し、それらが、学生にも伝わるような授業設計、および教材化が必要であると考えられる。今後の課題としては、臨床看護師の演習サポートを継続していく上で、臨床看護師の確保は最大の課題である。本調査は、循環型教育の中の学生-臨床看護師の2者に焦点を当てたが、循環型教育としての臨床看護師側のメリットも引き続き調査し、教育-臨床双方にとって利益となるような仕組みづくり、臨床へのフィードバックの方法などを検討していく必要がある。

Ⅶ. 結 論

1. 臨床看護師による演習サポートの満足度は例年高く、個別指導のほかにミニレクチャーの実施や、配置の工夫により、「技術の習得」「臨床の様子が聞けた」「技術の活用」「指導方法の違い」の改善に有意な差を認めた。
2. 学生の学びとして、【臨床現場のイメージ化】【臨床での技術の応用を知る機会】【習練への意識の高まり】【ロールモデルの発見】【ケア場面の具体化】【基礎を身に付ける大切さの実感】【看護師としての心構えを学ぶ】があった。
3. 臨床看護師による演習サポートは、ミニレクチャーの方法と配置の工夫など、教員との役割の違いを明確にすることにより、授業補助者としてのマンパワーではなく、学生には、よりリアルティのある実践的な技術の習得を助ける効果が

期待できるといえる。

4. 課題として,【指導方法の違いによる戸惑い】【臨床看護師との関わりの不足】があった。指導方法の違いについては,引き続き,課題であり,臨床看護師サポートの目的が学生にも伝わるような教材化が必要である。

引用文献

- 江尻晴美, 近藤暁子, 堀井直子, 中山奈津紀, 梅田奈歩, 荒川尚子, 大谷かがり, 杉田豊子, 松田麗子, 丸山尚子, 牧野典子 (2011). 成人看護学演習における授業補助導入による指導方法の評価2-2010年度と2011年度の比較より-. 中部大学教育研究, 11, 103-108.
- 倉ヶ市絵美佳, 橋元春美 (2011). 臨床と教育が協働し開発する『一人前看護師育成プログラム』. 看護教育, 52(5), 348-351.
- 眞鍋えみ子, 光木幸子, 岡山寧子 (2011a). 循環型教育システムの取り組み 基礎看護教育における役割. 看護教育, 52(5), 340-346.
- 眞鍋えみ子, 倉ヶ市絵美佳, 橋元晴美, 今村浪子 (2011b). 教育と臨床の協同による看護実践能力向上への取り組み-循環型教育システムによる看護師養成プランの紹介-, 京府医大誌, 120(10), 793-800.
- 佐藤光栄, 當房紀子, 高橋祐子, 二見和義, 綿貫克子 (2005). 基礎看護学における看護技術教育の充実をめざして 学校と臨床の技術教育の連携. 看護教育, 46(4), 283-286.
- 津田右子, 西澤三代子, 柴田京子, 武井功子, 入江寿美代, 平岡正史, 古屋敷明美 (2006). 基礎看護技術演習にかかわった10人の教員への学生評価からの指導評価 看護学生の自由記載法による全身清拭技術演習の指導内容評価への質的分析から. 看護学統合研究, 8(1), 10-18.
- 梅田奈歩, 近藤暁子, 江尻晴美, 中山奈津紀, 堀井直子, 杉田豊子, 松田麗子, 丸山尚子, 大谷かがり, 牧野典子 (2010). 成人看護学演習における授業補助導入による指導方法の評価-学内教員と授業補助者の学生による演習評価点の比較-. 中部大学教育研究, 10, 117-122.
- 山本加奈子, 川西美佐, 吉田和美, 三味祥子, 迫田綾子 (2012). 学生-教員-臨床看護師3者での循環型教育による基礎看護技術演習の効果. 第32回日本看護科学学会学術集会講演集, 343.

Issues of students' learning and continuance in basic nursing technique exercises supported by clinical nurses

Kanako YAMAMOTO*, Kazumi YOSHIDA*

Abstract:

Our own questionnaire surveys were carried out for three years to clarify issues of students' learning and continuance in basic nursing technique exercises supported by clinical nurses from the fiscal year 2011. The first survey revealed the issue of unification of teaching methods, which resulted in devising the exercises. In the fiscal year 2013, significant improvements were observed in acquisition of techniques ($p=.047$), sharing of clinical experience ($p=.015$), utilization of techniques ($p=.013$), and variety of teaching methods ($p=.000$). The exercises had effects of “stirring the imagination of clinical sites”, “providing opportunities to know clinical application of techniques”, “enhancing awareness about practice”, “finding role models”, “embodying care scenes”, “making students realize the importance of acquiring basics” and “learn a desirable attitude as a nurse”. The issue was confusion caused by the teaching methods that were not unified. The support was useful in not only technique acquisition but also realistic exercises, but teaching method unification remains the issue to be solved.

Keywords:

Basic nursing technique, Nursing technique exercises, Exercises supported by clinical nurses

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing